唐と拂菻國との國交のことは、早く貞觀の世に起り、其の十七年拂菻王波多力は使を遣はして來朝せしめ、太宗また璽書を下して答慰せり、高宗の時に至りては乾封二年（六六七）拂菻國より使を遣はして底也伽を獻じたること記さるれど（新舊唐書）（拂菻傳）然も絶えて拂菻國諸蕃招慰大使を差したるが如き記事なし、況んや其の西堺に於て碑を建てしが如きに至りては、眞に吾人の一大異聞とする所にして、果して之が眞正の記事なりとせば、唐代史乘に見ゆる外國傳の粗略なる、驚くに絶えたりと謂ふべし。由來斯る場合に於て、碑を立てゝ事を後世に傳ふるは、極て普通の手段にして、西方に於て其の例を求むれば、高宗の永徽三年（六五二）吐火羅の葉護那史烏濕波、表を奉じて立つを告ぐるや『高宗遣置州縣使王名遠、到其國、以所理阿緩大城、爲月氏都督府、各分其小城、爲二十四州、以烏濕波爲都督、王名遠請于吐火羅國立碑以紀聖德、帝從之』（太平寰宇記卷百八十六）と曰ふが如きは卽ち之なり。若し阿羅憾が招慰大使として拂菻に使せしことが事實ならば、もとより建碑のことは疑がふ可きに非ず、要は果して彼が斯る任務に服せしや否やにあり。今高宗時代に於る西方諸國との關係を見るに、波斯薩珊朝の最後の君主伊嗣俟（侯？）(Izdegerd) 西紀六五一年（或は六五二年）を以て殺さるゝや、其の子卑路斯 (Perose) は吐火羅に入り、『遣使者告難、高宗以遠不可師謝遣、會大食解而去、吐火羅以兵納之、龍朔初又訴爲大食所侵、是時天子方遣使者、到西域分置州縣、以疾陵城、爲波斯都督府、幷卑路斯爲都督、俄爲大食所滅、雖不能國、咸亨中獨入朝、授右武衞將軍、死』（唐書卷二百二十一下）と見ゆ、此の使を遣はして州縣を分置せしことは、通鑑によれば龍朔元年のことにして、其の『六月癸未、以吐火羅嚈噠罽賓波斯等十六國、置都督府八・州七十六・縣一百一十・軍府一百二十六、並隷安西都護府』と記せり、而して拂菻のことは、前述の如く之を認むるを得ざれども、然も波斯と拂菻との關係に至りては、また窺知し得べ